

西郷は維新成就の後、その膨大なエネルギーを使い果たしてしまったかのように、その言動に精彩を失ってしまった———とされている。

この人変わりの原因についてはいろいろな意見があるのだが、
前述したように
「西郷には革命の能力はあっても、
それが終わった後の行政についての能力には欠けていたのだ」
という見解が大勢を占めている。

もちろん、それを全面的に否定するものではない。

しかし、あれだけの頭脳が、
いきなりあらかたのエネルギーを奪い取られたように様変わりするものだろうか。

このことについて、面白い見方がある。

実は、西郷には行政能力

**(彼の行政能力とは、彼自身が政策を立案実行するというのではなく、
優れた企画実行力を持った人の上に人格的な重石として座るという形になろう)
だってあったのだ。**

**しかし、ある事、
あるいはあることどもがきっかけとなって
彼の為政に対する意欲をうばってしまったのではないか、
というのである。**

その主要な要因の一つに、赤報隊事件(仲間への裏切り)を挙げている。

この事件の概要を書くと———

相楽総三ら勤王の志を持つ草莽の志士が、
鳥羽伏見の戦端を開くため西郷の指令により江戸攪乱という汚れ役を
進んで買って出、見事任務を果たした。

その後、一旦京に戻った彼らは東征の先駆けとなるため、
年貢半減を旗印に京都を発って再度江戸を目指した。
勿論、これは官軍首脳の許可を得た上での行動だった。

この事件は、彼らが信州の下諏訪を通過するころに起こっている。

官軍首脳は、相楽らが年貢半減を掲げて江戸に向かう件につき許可を与えていたのであるが、彼らが京を後にしたすぐ後、現実の財政が思っていたよりも苦しいことがはっきりしてきた。

そうすると、先発して年貢半減を叫びながら東征する相楽らの言動は、新政府の為政上、大変都合の悪いことになってしまったのであった。

今彼らにそれらの言動を止めさせても、途上年貢半減を言ってきた言動は取り消しようがない。

**方法は一つ、彼らは偽官軍である、
として抹殺してしまうことなのである。**